



Osaka Gakuin University Repository

Title	外国語（ドイツ語、英語）学習について思うこと A Proposal on Self-Teaching Methods for Learning Foreign Languages
Author(s)	松本 和朗 (Kazuo Matsumoto)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 78 号 : 25-41
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Research Note/ 研究ノート
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

外国語（ドイツ語、英語）学習について思うこと

松 本 和 朗

はじめに

大学を退職して自由の身になって、自分の外国語（ドイツ語、英語）が錆びついてしまっていることに気づき、何とかしなければならないという気持ちになった。その頃、たまたま、町の図書館で映画『エベレスト』（邦題のまま、2015年米英映画）を見る機会があった。1996年5月のエヴェレスト大量遭難事故を題材にした映画で、日本人女性登山家の難波康子も登頂に成功しながらキャンプに帰還できず遭難死している。この遭難事故に興味をもち、この時、登頂に成功し、無事生還したジョン・クラカワー（ジャーナリスト）の本など数冊を読んだ。いままでの外国語勉強法を繰り返しても駄目なのではないかと漠然と考えていたので、この映画や遭難記から最高峰登頂を目指す登山家の事前の準備や訓練などを参考に、勉強法を少し変えてみることにした。

第一に、「大海」の語学勉強と銘打って、実用に耐える外国語を目指すこととし、できるだけ十分な時間をとって勉強することとした。

第二に、受験勉強で身につけてしまった、なんでも暗記して詰め込むのではなく、頭の中に記憶として残るものを活かすやり方に切り替えてみることにした。

第三に、語学勉強を持続させるため、子どもが母国語を習得する過程を参考にしながら、精神的に落ちこまないように注意することとした。

上記3点に共通するのは、焦らず、十分な時間をとって外国語を勉強すると

いうことである。

なお、大阪学院大学退職時に書いた拙稿「グローバル時代の外国語の勉強について」(『大阪学院大学通信』平成26年3月号)は、現役時代の体験をもとに書いたものであるが、本稿は、喜寿になってから始めた外国語再勉強の報告であり、その続編にあたるものである。

第1部「大海」の語学を目指して

1、きちっとした外国語脳をつくる

人間の脳の中に母国語脳のほか、外国語脳を持つとして、きちっとした外国語脳まで発達させるには、当然、それなりの時間をかける必要がある。そうになると、外国語の勉強は、「小川」という限定的なものではなく、実用に耐える外国語という「大海」に乗り出すことが目標となる。

もともと、短期間で達成できる目標、たとえば一年間で文法を徹底的に学ぶことなど、「小川」の外国語を学ぶことも意味がある。自分が「大海」に乗り出そうとしたのは、現役を離れ、比較的自由な時間が得られるようになったからにすぎない。

① 外国語脳が小さくなり、消えていかないようにする

外国語が錆びついたとき気がついたことは、きちっとした外国語脳をつくらないと、外国語脳は小さくなり、消えていってしまうということである。ずっと使いつづけている母国語脳は発展していくが、その母国語脳ですら長年使われないと弱くなる。それよりはるかに弱い外国語脳は、強い母国語脳の圧力にさらされ、ほうっておくと当然小さくなるし、それどころか消えていってしまう。

② 外国語脳間の境界線を明確にする

複数の外国語脳がまだ十分固まっていないと、外国語脳相互間の境界線があ

いまいとなり、混乱が生じる。英語をしゃべっていると、ドイツ語が出てくるし、ドイツ語でしゃべっているのに英語しかでてこないことがよくある。また、単語だけでなく、それぞれの文法が入り混じってしまうこともある。

③ 外国語の言語環境に身をおく

脳の中に、母国語脳と並んで、しっかりした外国語脳をつくるには、外国語に頻繁に接しうる環境に身をおくことである。この意味で外国での現地体験から得られるものは多い。しかし、ある英語学の大家は、日本にいても英語研究ができるとして、何度も薦められた留学の誘いを断られたという話もある。留学や現地体験がなくとも、それが外国語勉強の絶対的な障碍になるわけではない。幸いグローバル化の進展、パソコンなどの技術進歩で、国内にいても、そうした言語環境をつくるのが昔に比べはるかに容易になっている。

2、日本語脳も強くし、二刀流、三刀流の使い手となる

日本語に習熟していなければ、外国語も本当にうまくならないと言われるが、確かに、日本語を話す以上に外国語を話すことはできない。外国語を学ぶことは、母国語を武器として強い宮本武蔵になることであり、たとえば、原書一冊を読むかわりに、日本語に翻訳された本を読んで済みますなど、日本語が大きな助けとなる。他方、母国語と外国語が同族語系の言葉だと、母国語脳と外国語脳がそれ程の違和感なく共存できるようにも思われるが、日本語が母国語で欧米系の外国語を使う場合は、欧米の言語習慣と真っ向から対立するため、日本の宮本武蔵は大奮闘を余儀なくされる（第2部4で後述する）。

3、精神的に落ち込まないこと

エヴェレストで遭難する登山家が後を絶たない。登山家は登頂に成功するだけでなく、生きて帰ってくことに意味がある。ロンドン留学中、夏目漱石が英語の世界に圧倒され、病気になった話もあるように、外国語勉強では、拒絶

反応を起こす、あるいは、うつ病などになる人が少なくない。子どもが母国語を学ぶときのプロセスを参考にしながら、以下のやり方で精神的に落ち込まないようにすることにした。

① 分からなくとも気にしない

子どもが母国語をマスターするのに病気になったケースはあまり聞かない。それは、子どもは言葉が分からなくても平気だからである。子どもが母国語を習得するプロセスを成人がそのまま適用するということではなく、分からない外国語の世界を子どものようにあまり気にしないで受け止めていくことにした。

② 外国語は徹底的にミスをしまくる

母国語をマスターするのに子どもは数多くのミスを重ねる。多くのミスを重ねることを、自分は4M (many, many, many mistakes) と名づけている。些細なミスを恐れて金縛り状態になって話せなくなる日本人が少なくないし、語学の才能がないからと早い段階で投げ出す人も多い。これらの人に対しては、「これまでどれだけミスを重ねたのですか」と尋ねて、「そんな少しのミスではうまくならない」、「どんどんミスを重ねてください」と助言しようと思っている。

③ あまり気張らないで、三日坊主になっても続ける

外国語勉強は往々三日坊主になりがちである。とくに自分のような怠け者にとってはなかなか勉強が続けられないが、それでもあきらめないで続けることにしている。ヒアリングではすぐ寝てしまうが、繰り返し聴く（聞く？）ようにしている。外国語日記も、毎日書けなくとも、週一回でも月一回になってもよいから続けることにしている。

第2部 読み、書き、聴き、話す力の各論

人により、得手、不得手があり、また、おかれた環境も異なるので、それぞれにあった外国語勉強法が求められる。第2部では、還暦を過ぎてゆっくりにやっていくほかない自分の外国語の再勉強をあえて記述することとした。

1、読む力

ドイツ語の大家、関口^{つぎお}存男は、ドストエフスキーの『罪と罰』（7つ星か8つ星のレクラム文庫で千頁近くある）を最初のページから辞書を引き引きひたすら読み続け、2年かかり数百頁を読んだところで、ようやく分かり出したという。難解な原書を読了するには、十分な読書時間と、高い読書能力が必要である。そういう難行をこなせる大家や読書人は、ある意味で特殊な人たちである。自分は、大した読書もできず、低い山々の登攀にとどまったが、それでも読書から学んだことは少なくない。もっとも、読書に溺れてしまう危険もあるので、その時は思い切って本を捨てて街に出ることをお勧めする。

① 外国語新聞の読み方

教材としては、外国語新聞のほうが原書の本を読むよりはるかに楽である。最初のころは、記事の見出しを見て、分からない単語をさっとチェックする程度であったが、少しずつ、興味のもてそうな記事を部分的に読むようになり、さらには、記事全文に目を通すようにもなっている。しかし、外国語新聞を毎日丁寧に読むのは、かなり大変で、さぼってしまう日も少なくない。そのため、最近試みているのは、*The New York Times* の社説を音読するか、受験勉強式にどんどん線を引きながら、分からないことを気にせず読むやり方である（邦字紙の社説と比べ英字紙の社説のほうが学ぶところが多い）。

なお、英字新聞を読む場合、分からない単語は可能な範囲で辞書を引いて調べるようにしている。

② 原書の読み方

関口存男大先生のようにじっくり長編を読むのは、自分には無理であるが、読書の醍醐味は、日本語の本を読むように、いったん読みだしたら止められず引き込まれていくところにあると思っている。したがって、原書を読む場合でも、最初から単語をいちいち辞書を引きながら読むのではなく、知らない単語は一応ノートに書いておき、読了後、まとめて辞書を引くようにしている（時には、音読や、すべての行を鉛筆で線を引きながら読み続けることもあった）。

英語教材では、パール・バックの『大地』(Pearl. S. Buck, *The Good Earth*: Longman Simplified English Series 1963) を音読したとき、途中で何度か涙が出て止まらなかった。また、家内の使っていた教材『千夜一夜物語』(E. Dixon, *Fairy Tales from the Arabian Nights*: J. M. Dent and Sons LTD 1951) も面白く読むことができた。

ドイツ語の小説では、カール・マイのシリーズ（ドイツ版西部開拓シリーズ）の一冊 *Winnetou* などは、知らない単語が多かったものの、それなりに大筋を理解することができた。最近になって、原書で読むのは無理だと諦めていたシュテファン・ツヴァイクの短編小説集 (Stefan Zweig, *Novellen*: Mannese Verlag 2013) に挑戦している。

なお、子ども向けの本より、青少年向けの本の方が外国語勉強の教材には適している。子ども向けの本は、大人にはあまり面白くなく、また、出てくる単語も意外と難しい。

③ 辞書を擦り切れて使えなくなるほど引きまくる

外国語の上達度は、現在使っている辞書を十分使いこなしているか、それとも、あまり使っていないかを見ることで簡単にチェックできる。一冊目の辞書がすり切れて使えなくなり、二冊目の辞書を使っている人は相当な達人である（残念ながら自分の辞書はどれもきれいな状態のままである）。

2、書く力

「書く力」については、学校での作文指導で、言文一致で自由に書けばよいと教わった程度であり、大学のゼミでの論文指導も記憶に残っていない。ドイツの大学で、図書館を利用して百科事典や先行研究の文献にあたる方法を教わり、また、社会人になって仕事として実用文を書いてきただけである。

そんな中で、自分の「書く力」が画期的に改善されたのは、パソコンを使うようになってからであり、パソコンは自分の「書く力」の最高の家庭教師になっている。まず、パソコンで打てば、綺麗な文字となり、書き直しも簡単にできる。また、パソコンの外国語修正機能を使うことによって単語のスペルミスが修正される。ドイツ語の場合、面倒なウムラウト母音への転換操作も修正機能を使えば、ワンタッチで簡単に転換できる。

手紙などもパソコンで楽に書けるようになり、また、何度も失敗を繰り返してきた外国語日記も、今は、毎日10行の外国語日記をパソコンで書くことを日課としている。しかし怠け者の自分は、その日課すらこなせず、日記が週一回になり月一回になることもある。かつ、限られた語彙や初歩的な文章力で書いているので、われながら情けない外国語日記となっている。

3、聴く力

音の世界、音楽に弱い自分は、外国語の音を聞くと拒絶反応が起こり、すぐ寝てしまう。初めて外国語音を聞いたら、誰でも最初はまったく分からない。それが第一段階であり、ある程度勉強した第二段階になると、ほとんど分からないものの、幾つかの単語が分かるようになり、さらに進むと、大筋が分かってくる第三段階になる。この第三段階に短期間で到達できる人がリスニング力の達人である。リスニング力のない自分は、「聞いている」第二段階から「聴けている」第三段階になかなか到達しない。

① パソコンでドイツ語ニュースなどを見る

ドイツ語ニュースは、パソコンで ARD の *Tagesschau* (普通のニュース)、*100 Sekunden* (100秒ニュース)、*Tagesthemen* (時事解説の多いニュース) などを見ることができる。自分は *Tagesthemen* をできるだけ毎日聞くようにしている。この場合、音に慣れることを主眼とし、意味が分からなくても日課として続けるようにしている。なお、電波障害などで動画ニュースを見られない場合は、ARD のニュース解説 (文字版) を読むことにしている。

② CD を何度も聴く

昔はもっぱらカセット・テープを使っていたが、今は CD が主流である。ストーリーの大筋が分かるまで CD を何度も聴きつづけることは、原書を最後まで読みつづけるのと同じような根気のいる作業となる。ウィーンの本屋で薦められた Alissa Walser の *Am Anfang war die Nacht Musik* (Osterwold の CD 6 枚、448 分もの) は、最初は全く分からなかったが、意地になって何度も聞いているうちに、何とか大筋を理解できた。リスニング力がどれだけついたかは分からないが、ある種の達成感を持つことができた。なお、CD は、映画や DVD よりもはるかにリスニング効果があるが、自分はすぐ寝てしまうので、睡眠防止のため、朗読の一文章が終わったところで CD をいったん止め、たとえ正確な発音でなくとも、自分が聞き取った音をオウム返しに発声する練習も試みた (効果はあるが、これもかなりの難行である)。

(参考) カセット・テープのウォークマン時代の話であるが、英語のカセットでは、何度も聞いた Rosamunde Pilcher の *The Shell Seekers* や *Under Gemini* が懐かしい。また、Charlotte Brontë の *Jane Eyre* なども印象に残っている (いずれのカセットも 3 時間もの)。

③ DVDの映画を見ながらのリスニング

町の図書館から借りるDVDでアガサ・クリスティのポアロ探偵やミス・マープルのシリーズを見ている。これらのミステリーが教材として良いのは、何回か見ることにより大筋を理解できることである。最初は、英語字幕なしで、次は、英語字幕付きで何度も繰り返し見るようにしている。時折、画面を消してCDのようにして聴くこともあるが、その場合は、寝てしまうことが多い。なお、人名、地名や、宗教、文化などのなじみのない用語は一回聞いただけではなかなか聞き取れない。

余談であるが、ポアロ探偵シリーズに登場する人物の顔を識別することが意外に難しい。昔、外国人が日本人の顔を識別するのが難しいとよく言っていたことを思い出しながら、今はDVDのポアロ・シリーズでその逆体験をしている。

④ 映画館で映画を見る

リスニングの勉強としては、断然CDがよいが、それでも映画の楽しみは捨てがたい。語学勉強に向く映画は、西部劇などのアクション物より、言葉のやり取りの多い法廷もの（リーガル・サスペンス）である（すぐ思い浮かぶ名画は、『12人の怒れる男』（1957年米映画）である）。

高校生ぐらいのとき、西部劇を見て覚えた英語は、カウボーイが大声で叫んだstampede（牛の暴走）という単語だけであった。最近見た『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』（*Ex Libris—The New York Public Library*、2017年アメリカ映画）は3時間25分のドキュメンタリーで、図書館内部の幹部会の討議場面が何回か出て来た。音響効果がよかったせいか、議論の英語に迫力があり、その意味ではリスニングのよい勉強になった。

⑤ 子音の多い外国語は大きな声を出して話す

ここは「聴く力」の話ではあるが、音の世界の話なので、発声の仕方について

で少し触れておきたい。一番大切なことは、腹からできるだけ大きな声をだすことである。原則、子音に母音がついてくる日本語は、小さな声でも相手に聞こえるが、子音のみを発音することが多い欧米系の言語は、大きな声を出さないと相手に伝わらない。

なお、日本語化したカタカナ英語は、子音のあとに母音が入ってくるので、原語の読み方に変えないと通じないし、略語のカタカナ英語（たとえば、インフレーションをインフレという）も、要注意である。

4、話す力

「話す力」と言っても、挨拶のスピーチ、演説、ディベート、身近な人たちとの雑談、家庭内の会話などいろいろな場面があるが、基本的には特定、不特定の相手に話しをすることであり、聞き手が自分の話しにどこまで共感をもってもらえるかが成否の鍵を握る。「話す力」の中では、日本人に馴染のないディベート技術の習得が一番大変である。

(1) ディベート

「和の文化」の日本では、謙譲と思いやりが基本であり、論理攻めはしないというのが基本ルールであり、言葉の激しいやり取りや、ぎすぎすした議論は好まれない。このルールを破ると、時には相手方との感情的対立にまで発展し、人間関係が元に戻らなくなってしまう。他方、欧米の世界ではディベートの論理攻めが基本となっており、学校教育の段階から、ものごとを簡潔に説明し、また、自分の考えを明確に述べる訓練をしっかり受けている。日本の宮本武蔵は、グローバル・スタンダードとなっている欧米流のディベート技術をものにしていく必要がある。

なお、これまで、グローバル社会のディベートの言論戦では、議論で相手を論破することが第一だと考えていたが、本稿を書きながら、感情的な議論で相手を傷つけないようにし、冷静な議論を通じて、双方が合意できる落としどころ

を探っていくことが一番大切であることに気づき、他人との議論を通じて、自分の考えをより確かなものにしていくことが本当のディベート道でないかと思うようになった。狩野みきが『「自分で考える力」の授業』の中で、ディベートの第一の心得として「この世に絶対的に正しい意見など、ないと心得る」ことを強調していることに大いに共感している。

① しっかりした自分の意見を持つ

日本人でしっかりした意見を発言できる人は少ないといわれているが、それは、日本の社会では、自分の強い意見がなくとも特段の支障なくやっていけるからで、逆に余り自己主張が強すぎると周りから排斥されてしまう。

しっかりした自分の意見を持つには、日頃から、自分でよく考える、考え抜くことを習慣化することであり、また、自分の意見を相手に分かるように明確に語れるようにする言語化の訓練が大切である。

一つの方法は、自分の考えをまず紙に書いて考えを整理してみることである。また、自分の頭の中で仮想ディベート、討論の練習をすることも効果がある。さらに、欧米諸国で行われている **assertive training** を含む各種言語技術コースを日本の学校教育や、企業や官庁の実務研修に取り入れることは、グローバル社会の前線に立つ人々のディベート力強化に大いに役立つであろう。

② グローバル社会の言論戦のルール

グローバル社会のディベートでは、自分の意見がないと、言論戦の土俵にはあがれない。そこでは「沈黙は金なり」は通用せず、言葉で表現できないときや、切り返しができないときは負けと判定され、勝敗が決まってしまう。したがって、土俵から決して降りることのないように、反論のための二の矢、三の矢を十分準備して臨まなければならない。

ところで、日韓間の慰安婦問題論争を扱ったドキュメンタリー映画『主戦場』(*The Main Battleground of the Comfort Women Issues*, 2018年米映画、

日系アメリカ人監督ミキ・デザキ)を見た印象であるが、一つは、日韓双方とも感情的な議論になって言論戦のルールから完全に逸脱してしまっていること、もう一つは、論争では日本側が韓国側に押され気味に見えたことである。

(2) スピーチ (Public Speaking)

外山滋比古は、『聴覚思考』の中で、「日本には文字のことば、目のことばを、話し、聴く耳のことばよりありがたがる風土があった」、また、「古くから大勢の前でものを言う習慣がなかった」と指摘しているが、話す文化は、日本社会ではまだまだ大切にされていない。

在外勤務時代、スピーチ文化の伝統の中で育った数多くの達人に出会った。即席スピーチの上手な人や、難しいテーマでも原稿なしで講演する人が少なくなかった。ドイツなどは短いスピーチよりも長いスピーチのほうが評価されるが、その長いスピーチを原稿なしで話す政治家にも感心した。また、スポーツ選手がインタビューなどで、単文の会話調でなく、論理的に話していたのも驚きであった。

① 短い挨拶なら原稿を読まずにスピーチをする

日本では、原稿を読み上げる挨拶は一般的な慣行として認められているが、スピーチ文化の発達している国々では評価されない。どうしても原稿を読むなら、相手に気持ちが伝わるような読み方を工夫すべきである。もっとも、晩餐会や米大統領の就任演説などの公的スピーチは原稿を読むのが通例である。

② 上手な人に原稿を書いてもらうのもよい

アメリカ大統領のスピーチは専任のライターが書く。映画『LBJ ケネディの意志を継いだ男』(2016年米映画)では、暗殺されたケネディ大統領の後を継いだジョンソン大統領が、ケネディ大統領の分身といわれたセオドア・C・ソレンセンに強引に頼み込んでライターを引き受けてもらう場面があった。

③ 事前の練習も重要

映画『サラエヴォの銃声』（2016年ベルリン映画祭受賞、仏・ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ製作）を見たとき、映画のストーリーそのものよりも、ある政治家がホテルで何時間にもわたって延々と演説の練習をしている場面が一番印象に残った。スピーチ文化の発達した社会では、スピーカーは事前のリハーサルを欠かさない。

(3) 社交に強くなる

日本やビルマ/ミャンマーでは、相手の気持ちを察し合うハート・ツー・ハート・コミュニケーションが一般的である。他方、グローバル社会でのコミュニケーションは、言葉でのやりとりが基本であり、言葉で明確に意思表示していく必要がある。私的な会話であっても、いろんな人と相席する食事会などでは、近距離コミュニケーションではなく、遠距離コミュニケーションとなる。たとえば、映画が話題になれば、まず3つのテーマを瞬時に考え、「自分は3つの印象を持った、第一に、……。第二に、……。第三に、……。」というように説明するのが遠距離コミュニケーションである。これに対し、「映画を見てどうだった」と友達に聞かれて、「よかったよ」と応じてさらに「どこが」と進んでいくのが近距離コミュニケーションである。

あとがき

自分は欧州での在外勤務が多かったが、アジア勤務を二度体験している。あとがきというより、余談になるが、アジア勤務に係わる思い出を書いて、あとがきの代わりとさせていただきたい。

最初のアジア勤務は、バングラデシュ大使館で、このとき読んだジョージ・オーウェルの『ビルマの日々』（音羽書房 1980年）は、それまで全く関心なかった文学の世界に自分の目を開かせてくれた。その後、オーウェルが気に

なり、原書を含め何冊か読み、どこまで理解できたかは別として、『鯨の腹の中でいくつかのエッセイ集』(*Inside the Whale and Other Essays: Penguin Books 1957*) の中の「象を撃つ」(“Shooting an Elephant”) が印象に残っている。

二度目のアジア勤務は、ビルマ/ミャンマー大使館であったが、マ・ラーキンの『ミャンマーという国への旅』(晶文社、2005年) を読んで、世界各国に熱心なオーウェル・ファンがいることを知った。また、ビルマの人たちと接して気がついたのは、独特のハート・ツー・ハート・コミュニケーションである。一番苦勞したのは、贈り物をする時である。ビルマの人たちは何が欲しいかということを具体的に言ってくれず、こちらで適当に贈り物を選ぶしかなかった。ビルマの人たちは、親しい間柄だと、当然相手は自分の欲するものを知ってくれているので、自分の方から差し出がましく口に出すべきではないと考えている。もどかしい思いをすると同時に、奥ゆかしさの残るやりとりにはっとする気持ちにもなった。

(2019年9月15日記)

本小論作成に当たり、外務省 OB の黒川剛元オーストリア大使、多賀敏行元チュニジア大使(現大阪学院大学教授)、大阪学院大学外国部学部川本裕未教授、同大学神谷善弘准教授より貴重なご助言をいただいたことに深謝する。とくに、黒川元大使、川本教授より内容及び編集について詳細なコメントをいただいたことに謝意を表したい。

参考文献

(参考1)

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』青土社 2010年

- 狩野みき『「自分で考える力」の授業』日本実業出版社 2013年
 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書 1981年
 木下是雄『日本人の言語環境を考える』木下是雄集3、昌文社 1996年
 松本道弘『英語アレルギーの治し方』KKベストセラーズ 1998年
 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社 2003年
 外山滋比古『聴覚思考』中央公論新社 2014年
 柳父章『日本語をどう書くか』法政大学出版局 2003年

(参考2) エヴェレスト遭難記

- ブクレーフ, アナトリ: デウォルト, G. ウェストン『デス・ゾーン8848M、
 エヴェレスト大量遭難の真実』角川書店 1988年
 クラカワー, ジョン『空へ エヴェレストの悲劇はなぜ起きたか』文藝春秋
 1997年
 ウェザーズ, ベック『死者として残されて』光文社 2001年

A Proposal on Self-Teaching Methods for Learning Foreign Languages

Kazuo Matsumoto

This paper describes how the author is learning German and English. After he saw the film *Everest*, he got deeply interested in the tragic Mt. Everest disaster in 1996. He read further several books about the disaster, which made him feel the necessity of a lot more knowledge and skills of foreign languages as well as the importance of careful and elaborate preparations like those that expert climbers make before climbing to the summit. Eventually, he got an inspiration to change his methods of learning foreign languages in the following ways:

- ① Embark on the ocean of German and English World by being immersed in these languages as much as possible.
- ② Rely on the remaining memories about German and English in the brain rather than forcibly make efforts to memorize new German and English words and phrases.
- ③ Don't become depressed but take account of the process how the children acquire their mother tongue.

What the above mentioned three points have in common is investing ample time in study and tackling with German and English in the relaxed manner.

In the second section the author explains his way of developing each of the four skills of language learning, that is, reading, writing, listening and speaking. Several examples are shown in the following way:

He tries to read a book to the end, without consulting with a dictionary. After completing the reading, he confirms the unknown words by consulting with a dictionary. He writes a diary in German and English by the help of spell checking and proofreading functions of the personal computer. It is recommended to listen to German and English again and again by watching newscasts on the computer, listening to CDs repeatedly, etc. The debate is not an easy task for many Japanese. He believes that the language arts education and practical training of debating are crucial for people who are engaged in the global communication.